

What are clouds?

A cloud is a large **collection** of very small **drops** of **water** or ice crystals. The drops are so small and light that they can **float** in the air.

How are clouds formed?

All air holds water, but near the ground the water is usually in the **form** of an **invisible** gas. The name of the gas is water vapor. When warm air rises, it **expands** and cools. Cool air can't hold as much water vapor as warm air, so some of the vapor **condenses** and gets on very small pieces of **dust** in the air. The vapor makes a very small drop around each dust **particle**. When **billions** of these drops come together they become a **visible** cloud.

教室が英語使用の場となるようなアクティビティを考える際、英語のみならず他教科における学習内容に注目してみるのはいかがでしょうか。

教科内容と言語学習を統合して指導することを内容言語統合型学習 CLIL (Content and Language Integrated Learning) といい、特にヨーロッパの外国語教育を中心に、2000 年以降盛んに実践されています。CLIL の掲げる原理は、「使いながら学び、学びながら使う (Learn as you use, use as you learn.)」であり、その方法論として、内容 (Content)、言語 (Communication)、思考 (Cognition)、協学 (Community) を有機的に結びつけ、この枠組みに則して教材を作りと指導を行うことで、言語学習と内容理解の相乗効果 (synergy) により高品質の教育が実現されるとされています (Coyle & Marsh, 2010)。

中学校における CLIL 指導は、年少数回でも定期的に、授業の一部で、日本語も交えつつ行うとよいでしょう (渡部・池田・和泉, 2011)。特に初期段階では、インプット活動に適していると考えられます。一部の生徒だけが体験したことや興味のあることに偏ることのないよう、教科学習や学校行事で生徒が何を学び、何を体験しているのかに注目してみましょう。母語による学習の背景知識を活かし、興味をもって未知語の推測などに発展できる教材作りが理想的です。クラス単位で参加する授業や活動を応用すると、授業中の生徒同士の協働も期待でき、定期的に継続しやすくなります。

たとえば、ある中学校 2 年生のシラバスでは 6 月に理科の第 2 分野で「雲のでき方と水蒸気」を学習します。日常生活でも「雲」は馴染みのあるものなので、扱いやすいトピックです。英文はなるべくオリジナルのものを採用することをお勧めします。また、加工を最小限にとどめるため、中学生用には、

英語圏の小学校 (中～高学年) の教科書レベルのものから英文を採用するとよいでしょう。洋書の児童向けのテキストなどを参考にしてもよいし、最近では以下のような CLIL を主眼においたアクティビティのマニュアルも出版されています。

- ・“Starter: CLIL Activity book for beginners” (Westermann)
- ・“CLIL Activities: A resource for subject and language teachers” (Cambridge)

ウェブサイトでも、子ども用の科学などを扱ったものがあるので活用できます。さらに YouTube などの動画も多くあるので、ヴィジュアルと合わせて音源入手もでき、活用しやすいでしょう。「雲のでき方」を扱った上記の英文は、インターネットのサイト: [weather WizKiz \(http://www.weatherwizkids.com/weatheclouds.htm\)](http://www.weatherwizkids.com/weatheclouds.htm) から

採用したもので既習内容を考慮して加工してあります。未習語は状況に合わせて日本語による補足が必要ですが、リーディング活動の際は日本語のルビを記したまま生徒に配布して構わないでしょう。“ice crystals” や “water vapor” といった語彙や、“so ~ that ...” の示す意味を推測させることをねらいとしています。

リスニング活動の際は、音源は「肉声」という教具を使用してはいかがでしょうか。まごつく機器操作で生徒の学習意欲を削ぐよりも、コミュニケーション活動を念頭に表情や様子を見ながら、内容が直聴直解で伝わるように、繰返しや抑揚、スピード調節に配慮し、ジェスチャーやヴィジュアルの使用、時には母語で補足しながら授業を進めるとよいのではないのでしょうか。英語を聞かせるための教師の発音練習にもなります。また、グループワークなどを取り入れ、内容理解の確認ができる設問等を用意すると「思考」が期待できる活動になります。